

原著＜論文＞

保育者からみた心理専門職との協働

—経験による変化と関係性に着目して—

原口 喜充* 大谷 多加志**

本研究では、保育者からみた心理専門職との協働に対する認識を明らかにすることを目的とする。経験年数の異なる6名の保育士に対しインタビュー調査を実施し、SCATを用いて分析した。

分析の結果、経験年数ごとに心理専門職に対する認識に違いがみられた。新任の時には心理専門職を「先生」として捉えていたが、経験を重ねると密な関わりをするようになっていた。またベテラン保育者は、心理専門職の見方を取り入れて、ある程度同じような見方ができるようになっていた。以上の結果に基づき、経験年数による変化を示し、よりよい協働のあり方について考察を加えた。

キーワード：保育者、心理専門職、協働、専門性の異同、SCAT

Collaboration with Psychological Professions from Nursery Teachers' Perspectives: Focusing on Changes in Childcare Experiences and their Relationships

Hisami Haraguchi and Takashi Otani

This study aims to clarify collaboration with psychological professions from nursery teachers' perspectives. The authors interviewed 6 nursery teachers that had different amounts of experience. Qualitative data was analyzed using Steps for Coding and Theorization.

As a result, different perspectives for psychological professions were indicated by years of experience. Novice teachers perceived the psychological profession as a “teacher” who teaches psychology in school. As they experienced collaboration with psychological professions, collaboration was done closely. Experienced teachers internalized the viewpoint of psychological professions and understood children closely psychologically. In conclusion, nursery teachers' changes of perspectives for psychological professions were shown. Better collaboration was discussed.

Key Word : nursery teachers, psychological professions, collaboration, difference of expertise, Steps for Coding and Theorization

1. 問題と目的

保育場面において気になる子どもの増加¹⁾や対応の難しい保護者の問題の顕著化²⁾など

保育者に求められることが多様化、複雑化している。さらに、保育者はこれらの要因が重なって心身の疲労が溜まることで、保育に対する余裕のなさから保育がうまくいかなくなり、自責感や気分の落ち込み、発熱や腹痛などの身体症状が生じる³⁾。

このような現状を踏まえ守ら⁴⁾は、保育現

* 大阪大学大学院 臨床心理学

** 京都国際社会福祉センター 発達心理学

場において心理や医療の専門家の間接的支援が重要な役割を担うと指摘している。保育現場における他職種の1つとして、臨床心理士や臨床発達心理士などの心理専門職（以下、心理職）がある。先行研究においては、主に発達臨床の立場から、巡回相談を保育現場でのコンサルテーションであると捉え、研究が行われてきた。浜谷⁵⁾は、巡回相談の相談員の専門性や相談形式が自治体によって多様である⁶⁾ことを踏まえ、発達臨床の専門性を持つ相談員が行う2市の巡回相談を対象として取り上げ、支援機能や構造といった巡回相談の支援モデルの1つを示した。さらに芦澤ら⁷⁾は、この浜谷のモデルに基づき幼稚園における巡回相談の支援機能と構造を示した。これらの先行研究では支援の枠組みや効果が明らかにされ、保育者と心理職との協働の重要性が指摘されている。

一方で、保育コンサルテーションについて「専門家が保育者への教授という一方通行の域を脱しない」⁸⁾という指摘がある。保育者を対象とした実情やニーズに関する研究においては、相談内容についてのずれを感じた保育者のあきらめ感⁹⁾や巡回相談はやらざるを得ない、保育が中断するといったネガティブな語り¹⁰⁾も示されている。また、保育者の心理職などの専門家に対する依存の問題も指摘されており¹¹⁾、協働が有効に機能していない場合があると言える。

そのような現状を踏まえ、保育者の主体的な参加を重視したコンサルテーションについて研究がなされている。守ら¹²⁾は、助言を「その後」保育者がどのように発展・応用させたかという点に着目しコンサルテーションの事例を分析した。その結果、保育者が主体的な保育実践を導くためのコンサルテーションの成立要因として、「保育者の焦燥感の引き受け」、「専門家による行動の意味の言語化」、「保育者の主体的判断と選択の余地」という心理職などの専門家の態度やあり方を挙げている。阿部^{13) 14)}は一連の研究で保育士による協議中心の問題解決志

向性コンサルテーションを開発し、効果として保育士の効力感の向上や主体的な保育スキルの獲得が促進されることを示した。

また、心理臨床学に基づく保育カウンセラーの立場からは、協働とは「対等な関係性」¹⁵⁾で「子どもにかかわる関係者間の信頼を基に」¹⁶⁾なされると指摘されている。また、コンサルテーションにおいてカウンセラーが保育者とは違った角度での観点から見方を伝え、「相互に検討し合う」¹⁷⁾と指摘されており、心理職が一方向的に教えるのではない対等な関係性が強調されている。原口¹⁸⁾は、保育カウンセリングにおけるコンサルテーション事例の分析を行い、関わりを重ねる中で形成される信頼関係に注目し、保育者と共に悩みを抱え、共に検討していく支援のあり方を示している。

このように先行研究においては、保育コンサルテーションにおける協働的な関係性のための心理職の態度やあり方が指摘されてきた。しかし、心理職の側の言動、態度やあり方を検討するだけで良いのだろうか。上述の通り、協働において保育者と心理職の関係性が重要であるとすれば、保育者が心理職のあり方をどのように受け止め、協働に臨んでいるのかという点も考慮される必要がある。これらが明らかになれば、これまで指摘されてきた心理職のあり方をさらに補強、修正することができると考えられる。

そこで、本研究では保育者からみた心理職との連携に対する認識を明らかにする。なお、保育者の経験年数や心理職と関わった経験によって認識も変化すると考えられるため、本研究では経験年数の異なる保育者について、初期のイメージとこれまでの関わり、現在の認識について調査を行う。

II. 方 法

1. データ収集

縁故法により保育所一園に依頼し、保育士に対するインタビュー調査によって収集した。この保育所を選んだ理由は、心理職と関わる機会

が多く、第2著者が園との関わりがあるため、インタビュー調査において豊かな語りが得られると考えたためである。また、同一保育所の保育士を対象とすることで、職場環境や現在関わっている心理職が統一され、保育者ごとの経験の違いが語りに反映されやすいと考えた。

対象となった保育所における保育士と心理職との関わりは、巡回相談と研究協力との2つがある。巡回相談は自治体の取り組みであり、各年度を前期と後期に分け各期1～2回、巡回相談員が園を訪問する。巡回相談員が保育場面の行動観察や新版K式発達検査を用いた園児のアセスメントに基づくコンサルテーションを行う。巡回相談員は臨床心理士や臨床発達心理士などの心理職で構成されており、対象となった保育所の巡回相談員は臨床発達心理士の有資格者であった。また、この巡回相談員が15年以上この園を担当している。研究協力については、外部の研究者が行っている発達に関する研究に協力しており、園児に対し定期的に発達検査が行われている。保育士は検査場面に陪席したり、結果のフィードバックを受けたりしている。

(1) 調査協力者

保育士6名（男性1名、女性5名）を対象とした（表1）。

表1 調査協力者の属性

	年齢	性別	保育士歴
A	20代前半	女性	半年
B	20代後半	女性	7年（非常勤4年）
C	30代前半	女性	13年
D	40代前半	男性	21年
E	50代前半	女性	30年
F	50代前半	女性	30年

(2) 調査時期

2015年8月～10月。

(3) 面接内容及び手続き

面接は落ち着いた雰囲気の中で安心して実施できるよう、保育所の空いている保育室を使用し、基本的に一対一で全て第2著者が行った。しかし、調査協力者CとDについては行き違いがあり、2名同時に面接を行った。第2著者

は、保育所で行う研究目的での検査を実施する立場にあり、調査協力者とは調査前から関わりがあった。面接時間は合計3時間55分（最長1時間11分、最短31分）であり、平均47分であった。

面接では、心理職との協働経験や心理職への認識・ニーズと、発達検査や知能検査に関する認識・ニーズについての半構造化インタビューを行った。本研究で取り上げる心理職への認識・ニーズに直接関連する質問項目は、①現在の心理職との関わりはどのようなものがあるか。また関わった心理職はどういう人か、②心理職と協働し始める前に、心理職に対するイメージはどのようなものか、③心理職と協働し始めた頃、やりとりはどのように行ったか、④心理職との関わりで、役に立ったことや困ったことはあるか、⑤今回のお話を踏まえ、自身の中で、初期の頃と比べ心理職に対する捉え方はどのように変化していると感じるか、⑥現在、心理職と仕事をしていてもっとこうして欲しいと思うこと（ニーズ）はあるか、であった。

得られたデータのうち、発達検査や知能検査に関する語りに関しては、原口・大谷¹⁹⁾で発表している。なお、本研究は保育士の視点を重視しているため、調査協力者が自発的に語り始めた場合は制止せず、自由な対話が行われるように配慮した。面接内容は調査協力者の許可を得た上で、ICレコーダーで録音された。

(4) 倫理的配慮

本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系研究倫理委員会の承認を経て実施された（承認番号：15005）。調査にあたって、研究概要、研究協力の中断や辞退の自由、データは研究目的でのみ使用すること、公表の際は個人が特定されないよう細心の注意を払うことを口頭及び書面により説明した上で、調査協力者の自由意思のもと研究協力の同意書への署名を得た。

2. 分析方法

録音された面接内容を逐語録化したものを

データとし、大谷^{20) 21)}が開発したSCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて分析した。SCATは、段階的にコーディングを進めていくため分析手続きが明晰であり、分析のプロセスが明示されるため妥当性の検討を行いやすい。また小規模データを分析するのに適した手法である。本研究の調査協力者は保育者歴が大きく異なるため、全てのデータをまとめて分析し、一般化した理論の生成を目指すよりも、個々の保育者ごとに分析を行った上で、経験年数による異同を加味して検討する方が適切であると思われる。そこで、それぞれの保育者についてストーリーラインを描き出すのに適しているSCATを採用した。

データの分析は以下の手順で実施した。事前にインタビューの逐語録を発話者の発話が続き限り1つのまとまりと捉え、セグメント化する。コーディングは、まずセグメント化されたデータの〈1〉注目すべき語句を抽出する。〈2〉抽出した語句を言い換えるデータ外の語句を記入する。〈3〉前項の〈1〉〈2〉を説明するための概念、語句、文字列を記入する。〈4〉〈1〉～〈3〉に基づき自然に浮上したテーマを概念化し、テーマ・構成概念を記述する。以上を行いながら、他の発話やインタビュー、先行研究との比較が必要だと思う点を疑問・課題の欄に記述する。上記のコーディングを全ての発話について行う。コーディングを終えると〈4〉の記述内容を紡ぎ合わせてストーリーラインを作成する。その後、理論記述を試みる場合もあるが、本研究では各調査協力者における分析段階では理論記述を行わず、6名全てのストーリーラインを作成した後で、経験年数を考慮して考察を加えた。

なお、データの解釈可能性を再検討し、恣意的な解釈に陥る危険性を減らすため、SCATの経験がある博士前期課程と博士後期課程の大学院生それぞれ1名に、批判的観点からの検討を依頼し、ディスカッションを行った。

III. 結果と考察

SCATを用いて得られた各調査協力者のストーリーラインを表2に示す。表2ではストーリーラインを便宜上以下の3つのテーマで分割して示した。テーマは、保育者として勤務する前後の心理職に対するイメージである“初期の心理職イメージ”、これまでの関わりの中で保育者にとって役に立った／困った心理職の関わりである“役に立ったこと・困ったこと”、調査時点での心理職や専門性の異同に対する認識やニーズである“心理職に対する現在の認識”である。表において分析で得られた概念名は下線を引いた。以下では、それぞれのテーマごとに分析結果の詳細を示し、適宜考察を加える。なお、SCATから得られた概念名を示すときは【 】, インタビューでの発言を引用するときは『 』内に示し、必要に応じて()内にどの調査協力者から得られた概念や発言であるかを示す。

1. 初期の心理職イメージ

まず、保育者になる以前の心理学との関わりは、主に養成校時代の授業を通してであった。そのため【勉強としての心理学】には触れてきたが、それが保育や実際の子どもの様子とながらるものとは捉えられていなかった。心理職に対しても、『頭の堅い、心理学の先生』(C)、『研究をしている大学の心理学の先生』『病院のカウンセラーの先生』(A)など総じて【「堅い」心理職イメージ】を抱いているか、そもそも【具体的イメージを持っていない】(E)だった。保育者として心理職と関わる前は、心理職に対して心理学を教えてくれる『先生』として、ある種の下上関係のある存在であると捉えられていたと言える。

自身が保育現場で勤務するようになり【専門家同士としての関わり】(B, C)を持つようになると、【保育と心理がつながる】(B)経験をし、心理職の【活動内容】(E)や【専門性の異同】(C)の理解が進んでいた。心理職の実際の

表2 心理職に対する認識についてのストーリーライン

	新人期の心理職イメージ	役に立ったこと・困ったこと	現在の心理職イメージとニーズ
A	現場で関わる前に心理職に対して抱いていたイメージは、研究者やカウンセラーといった「 <u>堅い</u> 」心理職イメージであり、 <u>保育とはつながっていない</u> かった。心理職との直接の関わりは少ないが、先輩保育者を通して心理職との間接的な関わりの中でかみ砕いて教えてもらうことで、心理職が現場に入って観察することがわかり、心理職イメージの軟化が起こった。	心理職によるコンサルテーションを通して、園児に対する対応の案が浮かんできた経験から、心理職によって <u>保育のポイントが明確化</u> され、 <u>保育を見つめ直すきっかけが得られる</u> と感じていた。一方、気になることとして、 <u>心理職が園児と関わる際の戸惑い</u> を挙げた。立場や専門性の違いに理解を示しつつ、 <u>園児の側の関わりたい気持ち</u> があるため、 <u>園児と関わって欲しい想い</u> があると語られた。	保育者と心理職では専門性が異なるがどちらも園児の育ちを考えているため、 <u>子ども中心の連携</u> を行っていきると感じている。心理職へのイメージは当初の病院や大学の先生といったものから、一緒に園児を見ていく <u>存在</u> と変化していた。まだ心理職との関わりが少なくわからない部分も多いが、心理職との協働への期待を持っていた。
B	心理職に対する初期イメージは、養成校時代の <u>勉強としての心理学</u> に基づくものであり、 <u>保育とのつながり</u> なさを抱いていた。保育者になって心理職と専門家同士の関わりをすることで、 <u>保育と心理がつながる経験</u> をし、自身にとって心理職が「 <u>近い存在</u> 」になった。	心理職の見立てを聞くことで、 <u>園児の行動の意味の理解</u> が得られる。園児とほとんど毎日関わっている保育者にとって、心理職による客観的な視点からの観察や助言は、 <u>主観の相対化</u> をもたらした。「この子はこういう子」という認識を問い直す機会になる。また視覚支援など <u>見立てに基づく一般的対応</u> の助言も役に立っていた。一方、時間的な限られた時間の中での協働の難しさがあった。観察時に園児が気になる様子を見せない場合も多く、 <u>普段の様子が伝わらない不安</u> を抱いていた。	Bは常動になってから心理職との定期的な関わりを行うようになり、心理職を保育者を助ける <u>存在</u> だと感じている。心理職の客観的視点に基づき助言は、保育者の主観の相対化をもたらしたり、保護者に伝える際の裏付けになる。保育と心理の融合が園児の発達に寄与すると感じており、心理職への興味が出ているため、「 <u>吸収したい</u> 」という想いがある。
C	学生の頃勉強としての心理学は学んだが好き科目ではなく、「 <u>堅い</u> 」心理職イメージを持っていたが、専門家同士として関わりを通して、心理職イメージの軟化が起こった。心理職と関わってみると、保育者と同様に子どものことを考えて発言したり、園児と関わったりしているが、異なる専門性からみているという専門性の異同の理解が進んだ。	Cが思っていた視覚支援ではうまくいかない <u>一般的対応の限界</u> に直面した際、心理職の行動観察によってその園児の特徴的な見え方がわかった。個性のある見立てと対応を話し合い、園児に対する関わり方がわかった。一方、時間的な制限のため、聞きたいことを十分に聞けないなど、限られた時間の中での協働の難しさを感じていた。	専門性の違いについて、保育者は園児と共に <u>過</u> ごし、心理職は客観的観察を行うと捉えている。また心理職は伝える専門性を持っていると感じている。保育者という立場で保護者に子どもの気になる様子を伝えることへのためらいがあるが、心理職の見立てが保護者に伝える際の裏付けになったり、伝え方を聴いたり出来る。ニーズとしては、 <u>全ての園児を親で欲しい想い</u> やより詳細に話し合うなどの心理職との密な関わりを希求がある。しかし、心理職が訪れる頻度や時間、観れる園児の人数など制度・枠組みの限界も感じている。
D	巡回相談を通して初めて心理職と関わった。当時は、発達検査に基づいてなされた心理職の助言は、的確ではあるものの、保育では実施することが難しい <u>一方的な助言</u> であると感じていた。そのため <u>保育に対する理解のない専門家</u> として捉えられていたが、 <u>個別-集団</u> という見方の違いを超えたより良い協働の模索も行っていた。	ほとんど毎日関わる園児の発達凸凹に慣れ、あまり気にならなくなっているとき、心理職によって客観的視点からの助言を得ることで、 <u>主観の相対化</u> が出来る。特に、心理職の見立てを聞いて園児の行動の意味の理解が促されることで、普段の様子とつながり腑に落ちる体験をする。一般的対応の限界を感じていた際も、それぞれの園児に合わせた <u>個性のある見立て</u> と対応をともに考えることが出来る。 <u>保護者に対する伝え方の助言</u> も役に立っていた。一方、初期に出会ったような保育現場で実施できない、 <u>一方的助言</u> は「 <u>もったいない</u> 」と感じていた。	心理職は、保育者同様子どもに関わる専門家であるが、 <u>個別-集団</u> という視点の違いがあると感じている。視点の違いによって、心理職の助言は保育という枠組みの中で生かせないと感じることもある。心理職の見立てによって保育者の <u>主観の相対化</u> や <u>保護者に伝える際の裏付け</u> となるなど役に立つことも多いため、保育に生かせない場合は「 <u>もったいない</u> 」。対策としてDから心理職に対し、普段の様子や疑問点を伝えるといった、 <u>ずれを埋めるためのコミュニケーション</u> を取るようになっている。心理職に対して <u>も</u> 、保育現場がどのようなことをしているのか、 <u>保育現場を観る視点</u> も持って欲しいと思っている。
E	実際に心理職と関わる前に健診のようなことをすると聞いてはいたが、 <u>心理職に対する具体的なイメージ</u> は持っていないかった。初期の頃は直接の関わりもなかったが、園で巡回相談が行われた際に職員会議で報告を聞くなど、 <u>先輩保育者を通して心理職との間接的な関わり</u> の中で、心理職の活動内容の理解が進んでいった。	心理職の助言により、 <u>園児の行動の意味の理解</u> が出来ることで、新たな気づきが得られ <u>主観の相対化</u> がなされた。	複数の心理職と関わってきた経験から、視点や園児への関わり方について心理職ごとの違いが大きいと感じている。心理職の活動内容を理解している現在は、基本的に行動観察や検査は口出ししない <u>安心して任せる協働</u> を行っていた。ただ、園児にとって、普段の保育は日常、心理職がいる場は非日常であるため、心理職に対し園児の普段の様子が伝わらない不安もある。その点を補うために、普段の様子を心理職に伝えるなど密な関わりを希求があった。
F	Fが学んだ勉強としての心理学は、実際の子どもとの姿とつながらなかった。巡回相談における心理職との直接のやり取りは先輩保育者が行うことが多く、新任期のFは <u>先輩保育者を通して心理職との間接的な関わり</u> しかなかった。その中で、際の子どもの様子とはつながらなかった。心理職の活動内容の理解は進み、自身に子どもが生まれるまで、実際の子どもとの様子とはつながらなかった。	心理職との関わりの中で視覚支援やカウンタダウンなど、 <u>一般的対応が役に立った</u> と語った。また、「子どもの気持ち」をわかってくれる心理職によって <u>行動の意味の理解</u> が促された。心理職からは対応の助言よりも園児理解が中心に伝えられたため、Fからも普段の園児の様子を伝えやすく、 <u>双方向的なやり取りが行われた</u> 。一方、困りごととしては <u>保育者と心理職のずれ</u> を挙げた。ずれを感じる場面では、何年も関わってきた <u>園児と保育者の歴史</u> をわかって貰えないと感じていた。	これまでに複数の心理職と関わってきて、心理職ごとの違いに戸惑ったこともあったが、現在では心理職からの多くの学びを得たと感じている。その結果、Fの中で心理職の <u>内在化</u> がなされ、助言をある程度予測出来るようになった。Fにとって心理職とは、園児に対しなかなか <u>う</u> 感を抱えているとき、行動の意味の理解を促すことで保育者の疑問を晴らす <u>存在</u> である。ニーズとしては、気になる子だけでなく <u>全ての園児を親で欲しい想い</u> がある。

姿を目の当たりにすることで【心理職イメージの軟化】(A, C)が起こったと言える。ただし、保育キャリアの初期においては先輩保育者が心理職と関わるが多く、新人保育者は【先輩保育者を通した心理職との間接的な関わり】(A, E, F)に留まっていた場合も多かった。心理職とのコンサルテーション内容について、職員会議で他の保育者の報告を聴いたり(E)、自分より経験のある保育者から、心理職の助言をかみ砕いて教えて貰ったり(A)することで【活動内容の理解】(E)が進む場合もある。自分より経験年数のある保育者を通して知っていくことは、保育者が発達検査について知る過程と同様である²²⁾。しかし、Fのように自身が子育てをするまではあまり実際の子どもの様子とつながらなかったケースもあった。いずれにせよ、この段階では、心理職の活動内容や何らかの形で保育者にとって役に立つということへの理解は進んでいるが、具体的にどのような存在であるのかは明確になっていないと考えられる。

ある程度保育キャリアを積んでから心理職と関わるようになったDは、初期の心理職との関わりについて【一方的な助言】をされたように感じ、心理職は【保育に対する理解のない専門家】であると捉えられていた。それでも、心理職の発言が『的確』だとも感じており、【個別-集団】という視点の違いを超えた【より良い協働の模索】をしていた。

2. 役に立ったこと・困ったこと

次に役に立ったこととしては、【一般的対応】(B, F)、見立てや支援の【個別性】(C, D)、【行動の意味の理解】(B, D, E, F)、【主観の相対化】(B, D, E)というテーマが得られた。まず、視覚支援や行動の順序を示すことなど【一般的対応】を教わったことが役に立った。さらに、一般的対応では上手くいかず【一般的対応の限界】を感じていた場合も、心理職による【個別性】のある見立てや支援に関する助言によって、その子にあった関わりを考えることが

できた。心理職は行動観察や発達検査、保育者からの聴取によって得られた、具体的な園児の様子に基づき見立てを伝える。それによって、保育者が普段から漠然と疑問を感じている園児の様子について、【行動の意味の理解】が促される。また、保育者はほとんど毎日園児と関わるため、発達の凸凹や遅れに慣れてしまう。そこで、『定期的』(B)に訪れる心理職が『冷静な目で』(D)【客観的視点】から観察結果のフィードバックを行うことで、保育者は慣れてしまっていた発達の凸凹を再確認したり、【行動の意味の理解】が進んだりして【主観の相対化】ができる。心理職との関わりが『節目節目での(園児や保育を)考えるきっかけ』(A)になっていると言える。また、保護者に園児の気になる様子を伝える際にも、心理職の助言は役立っていた。

一方、困ったこととしては、【保育者と心理職の間でのずれ】(B, F)と【限られた時間の中での協働の難しさ】(B, C)が挙げられた。前者については、『私にしてみたら(その心理職は)1歳から入ってきたときのことを知らない』(F)という言葉に端的に示されているような、短時間の関わりから見立てる心理職に対し、【園児と保育者の歴史】(F)や【普段の様子が伝わらない不安】(B)、また保育現場での実践を踏まえていない【一方的助言】(D)であった。これらは、特に心理職の側が、保育者の専門性や日々行っている保育を尊重できていないことに起因すると考えられる。これら役に立ったことや困ったことについては、ほぼ先行研究と同様の結果になった^{23) 24)}。なお、“初期の心理職イメージ”と“役に立ったこと・困ったこと”においては、経験年数による明確な違いは得られなかった。

3. 心理職に対する現在の認識

保育者と心理職の専門性の異同についての現在の認識としては、どちらも子どもに関わる専門家であるということが同じ点として挙げられ

た。違いについては、子どもの見方や関わり方に関して語られた。具体的には【個別－集団】(D)、園児と【共に過ごす】－【客観的観察】(C)、【日常－非日常】(E)などである。つまり、保育者が“日常的に、集団の中で、園児と共に過ごす”のに対し、心理職は“非日常的な存在として、客観的観察を通して、個別的に園児を観る”という違いがあった。専門性の違いに起因するこのような違いによって、心理職は保育者に新たな視点をもたらすが、一方でこの違いが【ずれ】として現れると、『保育で活用できない助言』(D)と感じられることもある。

次に、現在の心理職イメージについて経験年数に着目すると、捉え方に違いが見られた。まず保育者1年目のAは【協働への期待】を持っており、常勤保育者として心理職と関わるようになって3年目のBは、心理職が【近い存在】になり、自身にとって役に立つ実感を重ねる中で【心理職への興味】が生まれ、『吸収したい』と心理職の視点を取り入れようとし始めていた。このように心理職と関わって年数が少ない場合でも、保育者にとって何か役に立つと感じ、積極的に関わっていかうとする気持ちが生まれていた。次に経験年数が13年のCと21年のDでは、直接心理職イメージは語られなかったが、上述のように具体的な専門性の違いが語られた。そして【ずれを埋めるためのコミュニケーション】(D)、【密な関わりの希求】(C)のように、より具体的に心理職との積極的な関わりを考えるようになっていた。保育者としての専門性が確立されていく中で、心理職との専門性の異同が明確になり、対等な関係性で協働する中で、心理職を有効活用するようになってきたと言える。関係性としては、初期に持っていた『先生』という言葉に代表される上下関係から、より対等な協働を行う存在へと心理職への捉え方が変わってきていると考えられる。

最後に、保育者歴30年ほどのFに至っては『たぶんこんな言わはるんやろうな』と心理職の見立てを予測できるようになっており、

【心理職を内在化】している。また同程度の経験年数であるEは、複数の心理職と関わった経験から個々人の違いを感じており、【心理職の相対化】がなされており、心理職の活動が十分理解できているため行動観察や検査には口出しすることなく【安心して任せる協働】を行えるようになっていた。ベテラン保育者については、心理職との関わりを積み重ねることで、保育という枠組みの内に、心理職を位置づけ関わるようになっていていると考えられる。

以上のように心理職への認識は経験年数によって違いが見られたが、概ね肯定的なイメージであった。ニーズとしては【密な関わりの希求】(C, E)と【全園児を観て欲しい思い】(C, F)、【保育現場を観る視点】(D)の3点が語られた。これらは、自身にとって有用な心理職をさらに活用するための視点である。心理職としては、保育現場の理解と【制度面】を考える必要がある。また、これらのニーズは経験年数が10年以上の調査協力者から得られた。調査協力者の中では経験年数が少ないAとBからは直接ニーズは語られず、【協働への期待】(A)や【心理職への興味】(B)が語られた。

IV. 総合考察

本研究では、保育者と心理職とのより良い協働関係を検討するために、保育者6名に対し心理職に対する認識についてインタビュー調査を行った。その結果、保育者は心理職と関わりを重ねる中で、保育と心理^{注1)}がつながり、心理職への認識も変化させていた。また心理職への認識や関わり方については、経験年数によって違いが見られた。各調査協力者のストーリーラインを基に、それぞれの経験年数を踏まえて、保育者の心理職に対する関わり、認識、専門性の位置づけの変化を図示すると、図1に示したようなプロセスになる。以下では、図1に示された変化のプロセスについて記述を試み、保育者からみた心理職との連携に対する認識を考慮した協働のあり方について考察を加える。

1. 心理職に対する認識の変化とその始まりとしての『先生』

まず“心理職との関わり”と“心理職への認識／想い”については、並行して以下のように変化していくと考えられる。保育者になる以前には、授業を通して心理学の『先生』と受動型の関わりを行っていたが、現場で働き始めると先輩保育者を通した間接的な関わりから心理職への理解が進み、協働への期待が生まれる。直接的に関わるようになると、保育者は心理職を近い存在と感じるようになり、関わる中で心理職の見方や知識を吸収していく。経験を重ね、保育者自身の専門性が培われていく中、心理職と繰り返し関わることで専門性の異同が明確になる。それに合わせて、保育者の関わり方もより積極的、能動的に変化する。最終的には保育者の中に心理職が内在化され、それぞれの領分の理解も進むことで、任せる部分は任せる形での協働が行えるようになる。

ここで守ら²⁵⁾の「保育者への教授という一方通行の域を脱しない」という指摘について考えてみると、そもそも保育者が心理学の専門家

と初めて関わるのは養成校時代の生徒と先生という関係性を通してであり、ここでは必然的に“一方的に教える／教わる”という側面がある。そのため保育者にとって心理学は教わるものであり、心理学の『先生』からは教えてもらうという構えを意識せずともってしまう可能性がある。つまり、現場で出会う心理職を心理学の『先生』だと捉えてしまい、心理職の側も『先生』としての役割を無意識に担い、結果として保育者へ心理職が一方的に教授する形になってしまっていると考えられる。そのため、まずは保育者と心理職の双方がこのような“一方的に教える／教わる”関係性になりがちであることを意識した上で、保育者の専門性が担保される工夫が必要であろう。

しかし、役に立ったこととしてベテラン保育者からも過去に【一般的対応】を心理職から教わったことが挙げられているため、教授する／されること自体は保育者にとって有効に働き得る。そのため、心理職の側が専門的な知識や見方を提供しつつも、保育者からも普段の保育や関わり、提供された見方に対する考えなどを

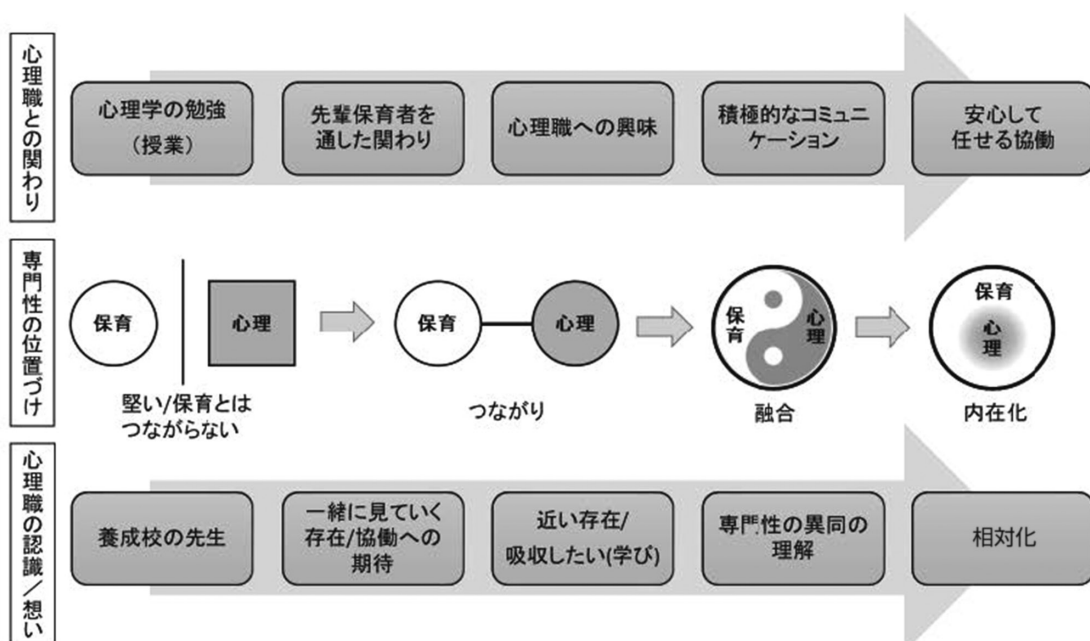


図1 保育者の心理職に対する認識の変化

聴き取り、双方向的なやり取りを成立させる必要がある。このような関係性が維持されていけば、その後のプロセスにあるように、互いにコミュニケーションを取りながら、徐々に任せるところは任せつつ関わるというように、協働の形が洗練されてくると考えられる。

2. 専門性の異同と心理職と関わる葛藤

次に保育者の中で、保育と心理のそれぞれの専門性の位置づけを見ると、授業を通して心理の『先生』と関わっていた頃は、心理の専門性は保育とつながらない、堅いものであると捉えられていたが、現場で実際に関わるとそれらがつながってくる。その後、保育の専門の中に心理の専門性を融合させ、保育の質を高める試みがなされる。そこでは、上述の通り、専門性の異同が意識されており、専門性を融合することの難しさや葛藤なども生じると考えられる。心理職との関係が上手くいかなければ『所詮そちの人』(A)と捉えられ、『保育園の生活に反映されない』ものとして、保育の専門性の中に組み入れていくことができずに終わってしまう。しかし、上手くいった場合には、最終的に保育の専門性の中に心理の専門性を位置づけ、内在化させることができる。この内在化のプロセスは、保育者自身がまず保育の専門性を確立させていることが前提であり、保育の専門性が十分に確立されていない時期には、『先生』から享受された心理の見方が保育の専門性を覆ってしまう危険性もある。

このプロセスを見ると、専門性の認識については前提としてその異同の理解が重要だと考えられる。ここで専門性の違いに着目すると、違いがあるからこそ保育者にとって心理職が役に立つ存在になり得るが、“一方的に教える／教わる”といったずれや葛藤にもつながり得る。違いによる葛藤は、保育者としての専門性を確立していく中で心理職の専門性も取り入れていく、中堅の時期に生じやすいと考えられる。今回の調査においても、ある程度保育キャリアを

積んでから心理職と関わるようになったDは、心理職の助言を的確だが保育に生かせない【一方的な助言】であると感じていた。

保育者アイデンティティの形成過程について、「揺らぎ」に着目して経験年数の異なる保育者へのインタビュー調査を行った足立・柴崎²⁶⁾によると、中堅期の保育者は「アイデンティティの再混乱と再構築」の時期にあるとされ、保育観や知識技術を獲得し「理想の保育」を追求する一方、業務や自身の子育てなどの多忙さによる限界に「揺らぎ」、周囲や社会からの認められなさに不満や戸惑いを感じているとされる。このような時期にある保育者にとって心理の専門性という新たなものを取り込み融合していくことは、自身が獲得・確立した保育の専門性を多少なりとも崩して再構築する試みであるため抵抗や葛藤が生じやすい。また、「理想の保育」を追求するために仕事を家に持ち帰るほど熱意を注いでいるにも拘わらず、社会に認められないと感じているため、自身の保育者としての自尊心が傷つけられることに過敏になっている状態であると考えられる。そのため、心理職などの他職種から保育に関して助言されることは、自尊心を脅かすもののように感じられ、“一方的”と受け止められやすいと考えられる。しかし、保育者がこのような構えになることは問題ではない。むしろ保育キャリアを積み重ねる中で必然的なプロセスであると言える。そのため、心理職には保育者の心理的な「揺らぎ」を前提とした関わりが望まれる。

また、このような時期にある保育者と心理職とのコンサルテーションでは必然的に【ずれ】が生じやすくなると考えられる。そこで重要なのは、ずれを生じさせないことではなく、CやDが意識して行っていたように、必然的に生じる【ずれ】を埋めるための密なコミュニケーションを行うことである。そう考えると、心理職に保育現場を理解して欲しいというニーズについても、心理職が保育の専門性や知識を身に着けることを求められているのではない。専門

性や見方、考え方の違いがあるということ自体を十分に意識した上で、現場で行われている保育や保育者の考えを知ろうとするやりとりが求められていると言える。このような形で保育の専門性が尊重されるからこそ、保育者にとって心理の専門性との異同が明確になり、心理の専門性が受け入れられ適切に位置づけられ、内在化に至ると考えられる。

3. 本研究の限界と今後の展望

最後に本研究の限界と今後の展望を述べる。まず、データ収集における限界として、本研究の調査協力者が、比較的心理職との関わりが深く、理解もある同一の保育所で勤務している点が挙げられる。実際には、巡回相談が行われるのみで、心理職との関わりも年数回程度の園も多く存在すると考えられる。そのため、関わりが少ない場合にも同様のプロセスを経るのか、変化のプロセスが進みにくいのか、それとも異なるプロセスが存在するのかといった点について実践・研究の両面から検討される必要がある。また今回の調査協力者は、概ね心理職に対して肯定的なイメージを語っていた。しかし、例えばDが心理職に対して【一方的な助言】や【ずれ】を感じていたことを考えると、心理職との関わりの重ね方によっては、今回の結果よりも否定的なイメージを持っている場合も考えられる。そのため、今後はより広い対象について研究がなされる必要があるが、本研究では保育者における心理職に対する認識を明らかにすることで、保育コンサルテーションにおける関係性に関する知見に新たな視点を持ち込むことができたと言える。

さらに今回の調査では、対象となった園で発達検査に関する研究が行われている影響もあってか、主にコンサルテーションにおける発達援助の側面に関する語りが得られた。しかし、先行研究ではコンサルテーションにおける保育者への心理的側面への影響も検討されている^{27) 28) 29)}。原口³⁰⁾は日々の保育や業務にお

ける保育者の心理的体験を質的に明らかにしたが、保育者としての熱心な想いと行動がその背景にあることを踏まえれば、保育者の心理的な負荷は避けられない側面である。原口³¹⁾は、保育者へのコンサルテーション事例の研究から、保育者への心理的側面も考慮したアプローチの可能性について提示しているが、今後コンサルテーションにおける保育者の心理的支援の側面についても研究がなされる必要がある。最後に、本研究は保育者と心理職との保育現場における協働を念頭においてなされた。今後、本研究で得られた知見が実際の協働場面に寄与することを望んでいる。

注

(注1) 保育現場における保育者の専門性と心理職の専門性は、必ずしも学問としての保育学、心理学に基づく知見だけではないと考える。そこで、それぞれの専門性を指す語として、学問の側面だけでないことを示すため“学”という文字を削除し、“保育”、“心理”と表記した。

引用文献

- (1)池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66(6). 815-820
- (2)亀崎美沙子 (2017) 保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤—親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐる—. 保育学研究, 55(1). 68-79
- (3)原口喜充 (2016) 日々の保育における担任保育者の保育体験—保育者の主観的体験に注目して—. 保育学研究, 54(1). 42-53
- (4)守巧・中野圭子・酒井幸子 (2013) 保育者の主体的な保育実践を導くコンサルテーション成立要因の抽出—コンサルテーション実施の「その後」に焦点を当てて—. 保育学研究,

- 51(3). 82-92
- (5) 浜谷直人 (2005) 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか—発達臨床コンサルテーションの支援モデル—. 発達心理学研究, 16(3). 300-310
- (6) 浜谷直人・秦野悦子・松山由紀・村田町子 (1990) 障害児保育における専門機関との連携—川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴—. 障害児問題研究, 60. 42-52
- (7) 芦澤清音・浜谷直人・田中浩司 (2008) 幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造—X市における発達臨床コンサルテーションの分析—. 発達心理学研究, 19(3). 252-263
- (8) 前掲(4)
- (9) 守巧・中野圭子・酒井幸子・矢澤弘美 (2015) 保育現場におけるコンサルテーションの実情と課題の解明—管理職・ベテラン保育者へのインタビューの質的分析より—. 保育学研究, 53(2). 75-83
- (10) 田中浩司・浜谷直人・芦澤清音・三山岳・五十嵐元子・飯野雄大 (2015) 幼稚園における巡回相談ニーズの検討—巡回相談を多く利用する幼稚園でのグループインタビューを通して—. 首都大学学東京紀要 人文学報, 50. 7-25
- (11) 阿部美穂子 (2015) 気になる子どもの変容を促す問題解決志向性コンサルテーションの効果に関する実践的研究—「行動の分析&支援シート」の開発と活用—. 保育学研究, 53(2). 52-63
- (12) 前掲(4)
- (13) 前掲(11)
- (14) 阿部美穂子 (2013) 保育士が主体となって取り組む問題解決志向性コンサルテーションが気になる子どもの保育効力感にもたらす効果の検討. 保育学研究, 51(3). 93-106
- (15) 滝口俊子 (2008) 保育カウンセリングとは. 滝口俊子・山口義枝 (編). 保育カウンセリング. 放送大学教育振興会. 11-20
- (16) 滝口俊子 (2015) 保育カウンセリングとは. 滝口俊子 (編). 子育て支援のための保育カウンセリング. ミネルヴァ書房. 1-18
- (17) 菅野信夫 (2004) キンダー (保育) カウンセリングの現状と展望. 天理大学カウンセリングルーム紀要, 1. 47-54
- (18) 原口喜充 (2017) 保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察. 心理臨床学研究, 35(5). 503-513
- (19) 原口喜充・大谷多加志 (2016) 保育士は新版K式発達検査2001をどのように捉えているのか?—検査との関わりが比較的多い保育士へのインタビューから—. 発達・療育研究, 32. 3-12
- (20) 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—. 感性工学, 10(3). 155-160
- (21) 大谷尚 (2007) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54(2). 27-44
- (22) 前掲(20)
- (23) 前掲(4)
- (24) 三山岳 (2011) 保育者はいかにして相談員の意見を受け止めるのか—巡回相談における保育者の概念変容プロセス—. 教育心理学研究, 59(2). 231-243
- (25) 前掲(4)
- (26) 足立里美・柴崎正行 (2010) 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討. 保育学研究, 48(2). 213-224
- (27) 前掲(4)
- (28) 前掲(18)
- (29) 前掲(5)
- (30) 前掲(3)
- (31) 前掲(18)